

# 「お島の存念書」考

——井伏鱒二の志向——

## 序

第二次大戦後の井伏鱒二の文学を見ると、二つの事象描出の隆替があるようである。一つは、戦中、戦後を通して戦争が生み出した非日常の告発であり、今一つは、それらに対し、我々の身辺に存する、日常庶民哀歎の描出である。前者が多く戦中の徴用体験、とくに山下奉文將軍から受けた屈辱的な体験<sup>1</sup>を主因とする戦時体制、そして戦後の荒廃状況の告発にあり、後者は、そういったものと離れた日常の生活をいつくしみ、その日々を大切に描き出してゆく、井伏文学の本道たる、庶民生活描出にある。それらは、戦後の井伏の文学の一つの隆替をもって現われている。そして、その隆替のはざまにあって、その両翼を一つ<sup>2</sup>の作品で持ち、その様相を鮮かに表象している作品に『お島の存念書』（昭25・3（26・7）という作品がある。戦後の井伏

## 榎 林 湜 二

の一つの象徴的な姿がそこにあり、それはまた、戦後のみならず、井伏文学全体における一特色を露呈している気配もある。以下、そこにとどまって、少しその様相の解析を試みてみたいというのが本稿の企図するところである。

### 一、

井伏鱒二の文学の中期の佳作『お島の存念書』は、「お島の存念書」（昭25・3『小説公園』、「お島の語る秋帆先生」（昭和26・4『小説公園』、「岡部の陣屋」（昭26・7『オール読物』）に分載、のち、多くの加筆、訂正、削除が行なわれ、『吉凶うらなひ』（昭27・1 文芸春秋新社）に『お島の存念書』としてまとめて収録された。（以下、初発表の第一部「お島の存念書」とのちにまとめられたものとを区別するため、前者を「お島の存念書」、後者を『お島の存念書』で記す）。

江戸時代の、いわゆる高島秋帆の疑獄事件を扱った作品であるこの小説について、井伏は次のように記している。

『お島』と云ふのは架空の人物で、『秋帆』は実在の人物である。秋帆の幽閉されてゐた長屋の実体は、図面を見ただけである。今は何も残つてゐない。』（『覚え書』）

《井伏鱒二自選全集》第二巻、昭60・11 新潮社）

すなわち、この作品の主たるモチーフは秋帆の半生記にある。加えて、水野越前守忠邦の天保の改革による、江戸庶民に対する厳しい取締り、妖臣烏居耀蔵らを使った蘭学者や洋学者達への弾圧の描出にあった。あわせて、偶然に見た武州岡部における秋帆が幽閉された陣屋の絵図面も、井伏の興趣をさそつたようである。主たる思いは秋帆の疑獄事件にあり、更には、その一焦点たる陣屋幽閉の状況を描き出すにあつたように思われる。そして、芸者のお島はその描出のために配された「架空の人物」であつた。

井伏からの聞き書きとして、伊馬春部も次のように解題している。

「この作品は、発端は、高島秋帆に関するありふれた資料により、後半、秋帆が幽閉されてからの物語は、武州岡部近在の弘光寺の住職から貰った資料によつたものである。（中略）お島という人物は、資料の不足を補うために設定した架空の人物である。」

町奉行が目明をつかつて、江戸市中の掃きだめや塵芥箱

を調べさせ、また禁制の絹の袖裏を着用している婦人の袂を切つて廻る件などは、そのまま戦時中の為政者とその周囲の仕業と同断である。当時の不愉快な時勢に対する憂晴らしのつもりであつたという。こういうことも戦後やつと書けるようになったのである。』（『解説』《屋根の上のサワシ》昭31・12 角川書店）

想はそのように成り、作品もひとまずは、そのように展開している。先の三部仕立てもまさにその表われであろう。秋帆の疑獄、幕府の圧政、そしてそのあと話ということである。しかし、事実はその内実に少し動きがあつた。そしてそこに、井伏らしい変化が見て取れる気配があるのである。すなわち、そこに二段階もしくは三段階の改変のあとがある。私は、その改変の過程とその結果とに、井伏の文学のもつ一つの姿が、いかにも鮮かに現われているように思うのである。その内実を少し追う。

## 二、

今、二段階、もしくは三段階の改変といった。その第一のものは、作品成立期の改変といつてよからう。先に見たように、この作品は三回に分けて発表された。そして、この三部仕立ての作品となる過程の中に、主モチーフの変化があるように思われるのである。まずは、そこから入つて

みたい。

これまで、この作品を三部仕立てとして話をすゝめてきた。しかし実は、そうではなかった。はじめは二部仕立てで構成されたようである。第一部『お島の存念書』の冒頭に前書き風に記され、のち一つの作品にまとめられるとき削除された、次のような一節がある。

「この口書は『お島の存念書』といふ表題だが、勝手放題の奇態な文章で書いてある。候文で『罷出で候処』といふやうにした文章もあり、記号文字で書いた『ムい升』といふやうな文章もあり、また漢文調で『いかにせんすべ無之、空しく腕を扼するのみ。』といふやうに書いた部分もある。それを口語文にまとめてみた。この『お島の存念書』は『其一』と『其二』に分れてゐるが、ここでは『其一』だけを出すことにした。」

明治五年、「誰か物好きの一人が、七十何歳のお島といふ老婆の口述を筆記したもの」という設定で始まるこの物語は、はじめの構想は、このように、二部仕立てであったのである。お島を介して、有名な高島秋帆の事歴と水野忠邦とその配下鳥居耀蔵達の権力をかさにきた悪辣な所業を描き出す、そこに主力はあった。この作品では、井伏にしては珍らしく、鳥居を始めから終りまで悪人として登場させている。この作品は、まさに、お島の語る秋帆の悲運とその時代告発の物語として構想されていたのである。そ

してそれらは変ってゆく。

第一部『お島の存念書』は、お島の若き日、秋帆との出会いに始まる。秋帆は二十か二十一歳、しかしすでに洒脱、十七歳のお島を酔わせるものがあった。あるとき、幫簡に折助が豪華な煙草入れを拾ったと告げられ、思わず腰に手をやり自分の煙草入れを探ったことを恥じ、彼はたまたまその座敷に出ていたお島に「江戸で一ばん安値な煙草入れ」を聞き、以降はそれを愛用する。あわせてお島を舐貢にする。高島は「砲術の練達者」として名を挙げ、江川太郎左衛門らと親交、天保十二年、江川の推挙で、武州徳丸原で「大砲打方の調練」を行なう。子息浅五郎をはじめ、門弟数十人をつれて江戸へ入った秋帆は、江戸の定宿長崎屋に泊る。お島は宿の女中に化けてお世話をする。徳丸原の調練は大成功、お島も長崎屋につれられ見物に行く。第一部『お島の存念書』はここまでである。

第二部『お島の語る秋帆先生』は、前をうけて始まる。「上首尾」に終わった「練兵砲術」で高島秋帆は江戸で大評判になり、秋帆の宿である長崎屋にはお祝いの客が次々に来る。当時、老中水野忠邦は様々な改革を行なっている時で、その配下の町奉行鳥居耀蔵は密偵を市中に放って徹しい取締りを行ない、また諸大名の「落度」を探しまわっていた。鳥居は秋帆の成功を嫉み、己れの職掌を軽視されたと恨む「將軍家お抱への砲術家」井上左太夫やその家来本

庄茂平治らと組んで、秋帆の追い落としをもくろむ。お島は長崎屋に泊りこみ、秋帆の世話をしてつかの間の幸せを得る。しかし、鳥居耀蔵や井上左太夫らの暗躍で秋帆は陥し入れられる。長崎へ帰った秋帆を追って、長崎に密偵に入った茂平治は、「秋帆に謀叛の疑ひ」ありと幕府に密告、秋帆は無実の罪で入牢、秋帆にかかわった多くの人々が連座、獄につながれる。お島も「極悪人に助成したる不屈者」として取調べを受ける。その時、お島はその不当さを怒って、「辰巳風」の啖呵をきり、「永牢の云ひ渡し」を受ける。お島の啖呵は次のようであった。

「急度お叱り、有難う存じます。でも、憚りながら私、秋帆先生に誑うそされたこと、まだ一度も御座いませぬ。秋帆先生に誑うそかされなかつた代り、どうやら狸と狐に誑うそされたかもしれませぬ。おや、その狸と狐は一つ穴から這ひ出して、糞うんちをしてるやうに見えて参りました。その糞うんちも、見たところ越中糞のやうで御座んすね。おや、越中糞の、糞うんちかづいで御座いました。」

「越中糞」とは「水野越前守」を当てこすつたものであり、「糞うんちかつぎの狸と狐」とは「一つ穴の鳥居耀蔵と井上左太夫」を当てこすつたものである。凄じい啖呵である。白洲は急に「色めき立つて」、お島は棒で打ちすえられる。体制への批判のこういった直露は、井伏には珍らしく、それはまさしく、戦中の軍国体制への諷論が込められている

もので、口吻はひどく激しい。井伏のそれらへの憤りが思量されるところである。

お島は天保十四年に「永牢」で入牢、その翌年、獄舎の火事で三日を限って外に出される。無事帰牢すると罪は軽減される。お島はそれにより中追放となる。秋帆も遠島のところ減ぜられ、武州岡部、安部公のところに「永預け」の身となる。牢の火事を起こしたのは高野長英にかかりのある者で、長英はその時逃亡、諸国を逃げ歩き、三年後、江戸の隠れ家で捕吏に囲まれ自刃する。その前後、多くの蘭学者達が捕えられたり自刃したりする。のち、許され、再び芸者になったお島は、お客の一人に上手に取り入り、その助けを得て秋帆の囚えられている岡部に行く。そこでお島は番人を口説き、こっそり「圀どや圀」の中に座っている秋帆を垣間見、改めて本格的に会いたいと思う。第二部はここで終わっている。初期の構想ではここで終わっていないはずである。

しかし、にもかかわらず、続いて、「岡部の陣屋」と題して第三話が描かれる。『オール読物』に発表されたとき、これまでの経緯がその前書きに詳しく記されている。だが、続く作品の内実は、秋帆に会おうとするお島の苦心話が蜒々と繰り広げられているのである。述べてきたように、ここで作の中心は少しずれている。これまでは、話の中心はお島を通じて見聞きした秋帆の悲運や幕政の批判にあっ

た、対して、ここでは秋帆に近づこうとするお島の苦勞話や悲恋の物語に変わっている。

お島は、金銭を使い、策を弄して土地の顔役累代五郎助に渡りをつけ、秋帆の幽閉されている岡部の陣に入ろうと苦勞する。金貨を営む五郎助から必要のないに金を借りたり、襲われる危険を冒して五郎助に酒食を供したりして、陣屋へ近づくと手づるをつかもうとする。結局は成功しなかったのであるが、そのやりとりは、お島の奮闘物語としてひどく詳しく描かれている。うまい手づるがつかめぬま、お島は、そこに泊った客を秋帆が一度訪ねてきたと聞くだけで、庄兵衛店という「旅籠」に仲働きとして住み込む。お島には何の欲得の思いはなく、ただ秋帆に会えればよいのである。しかし、機会はどうしても訪れない。最後、秋帆が捻挫して按摩にかかっていると聞き、その按摩に取り入り、「附添ひ」として陣屋に入ろうとする。しかしこの必死の試みも、門番に厳しく拒まれ、ついにお島は断念する。「あたしは待ちくたびれてしまひました。(中略)性急な女は絶えず性急にしないでゐないと気がすまないのではないかと思ひます。あたしが秋帆先生へ逢へる日等待つたのも、たぶんこの性分に任した故かと存じます。どうも自分で考へても、普通の色恋とは違つてゐたやうな氣も致します。」門前で、按摩の帰ってくるのを待ちながら、お島の心は次第に収まってくる。

「あたしは堀ばたを行きつ戻りつしてゐるうちに、そんなことを考へるやうになつてをりました。そこで漸くのこと、裏門のところへ菅市按摩が出たときには、あたしはもう秋帆先生にお目にかからなくつても仕方がないと思ふやうになつてをりました。待ちくたびれ、自分のことを嫌やらしい女のやうな氣がしてゐたので御座ゐます。」

秋帆を慕つて過ごした永い日々、しかし結局は寒らぬままに終るのである。按摩を送ってきた牢番に次のものを托して、その報いのない恋の行爲は終り、この第三話も閉じられる。

「あたしは名前を云はないで、かう申しました。

『よほど前に、高島様は、江戸深川でウニコールの根付の煙草入れを、ある男に引出物になさいました。あたしがそれを買ひとりました。その煙草入れの緒締めが、この簪の玉で御座います。さう仰有つて下さいまし。』

ちよつと齒の浮くやうな台詞と思ひましたが、せめてそんなやうな氣障ごとも云ふのが落ちになるやうな顛末で御座いました。たうとうそれつきり秋帆先生にお目にかかることが出来ませんでした。」

そこには、氣の強い、役人と争つて怯まなかつた、辰巳芸者風のお島はいない。ひたすら運命の何かと闘い、一筋に恋の道を貫き、そして断念するに到つた悲しい姿があるだけである。「お島の語る秋帆先生」の末尾にあったやう

に、到着直後、一度垣間見ただけで、岡部の陣屋近くで過ごした三ヶ月をこす日々の間、ついに一度も会うことも、姿を見ることがえもなかったのである。

はじめに記したように、お島は井伏が作りだした人物である。秋帆の悲劇、政治権力の弾圧の状況を描くため作られた、いわば語りの役のお島であった、それがいつのまにか、中心の人物になってきている。秋帆疑獄、幕府権力とそれに阿諛追従する人々の告発に始まったこれは、いつか人情話に変わっているのである。非日常から日常への回帰と言ってよい。第一の変化である。

### 三、

先に二段階もしくは三段階の変化といった、右のように、作品成立期にすでに変っていたこの作品は、のち、『お島の存念書』として一つの作品に統合されたとき、次なる変化を見せている。記してきたように、第一話は、お島の口述を「誰か物好きの人」が筆記したという前書きがある。

第二、三話も同じくそれぞれ前の話の荒筋を前書きとして記しつつ、話の中に入っている。そして、それらの前書きは、作品が一つの話に統合されたとき、消されたり、作品の中に組み込まれたりしてゆく。当然のことながら、統合される中で、第一話の前書きにあった、二部仕立てのもく

ろみの個所は消されている。その内実についてはすでに記した。続く第二話の前書きは、お島の説明として、「苗売り」芸者たるお島の姿が、ひどく詳細に語られている。少し長い、主要部を引くと次のようである。

「お島は吉原花街で客客たちから『苗売り芸者』と仇名で呼ばれてゐた。当時、水野の矢つぎ早やの改革は江戸市民怨嗟のまことにされてゐて、その苛政を諷刺する流行節『ちよぼくれ』が大いに流行した。そのうちで『苗売り』といふ題のちよぼくれは趣きが旧套を破つてゐて洒脱であつた。『苗や苗や、苗はよし、初物の茄子がない、胡瓜がない、隠元豆のもしがない、白粉あんまり塗れてがない、このせつ師匠の花見がない、浄るり新内寄場がない……』といふ冒頭である。ないない尽しのこの『苗売り』を、お島は好んで爪弾きの伴奏で語つてゐた。ちよぼくれは、小さな木魚をたたきながら語るのが本来だが、三味線の爪弾きに低い声で語れば密偵に咎められる怖れがない。お客も安心して諷刺の文句をききながら、ひそかに溜飲をさげることが出来る。」

前書きにこのように記す。これは、体制の告発者としてのお島の姿勢を記し、更には、そういう時勢とその告発を意図する作品のモチーフをも物語っている。井伏の意図の中には、第二次大戦中の為政者、そしてその追従者への怒りと怨嗟とが封じ込められているのである。

しかし、この部分は統合されたとき、秋帆に連座して取り調べを受ける前、まだ、秋帆が長崎屋に泊っている頃のお島の説明として作品の中に組み込まれている。それ故、秋帆は、お島を呼ぶとき、親しく「苗売り殿」と呼んだりするものである。ほんの少しのニュアンスの違いであるが、前者は、反骨芸者の語る秋帆の悲劇と幕政批判となり、後者は秋帆への心を通わしてゆく反骨の芸者お島と秋帆の物語へと変ってきている気配がある。だが、それにもまして心をそそのけるのは、第三部「岡部の陣屋」の前書きには、お島の恋心の詳しい説明があり、それを統合するとき、思い切りよく削除していることである。これまで、第一部から第三部へ、権力告発から恋物語へ、非日常から日常の物語へ変ってきたと述べてきた。しかし、その最後のところで、井伏は、お島の恋物語をまた少しもとへ修正しているのである。前書きの次のような個所である。

「お島の秋帆に対する恋慕の情は、今日の我々には（大げさに云へば）想像も及ばないやうなところがある。この女は弱年から花街で暮らしを立てて来た身の上で、年令から云つても分別も諦めもつきさうなものである。それが一向に聞きわけがない。——秋帆は岡部陣屋に移されたとき、四十九歳であつた。お島は四十三歳の中婆さんであつた。」

そういつたお島の愛の説明は次のように続く。

「しかし、お島は気が触れてゐたわけではない。左記の口書にも、『わたくし、べつに気が触れてましたわけでは御座いません。ただ、秋帆先生にお逢ひしてさへすればよろしいのでした。でも『逢ふ瀬』なんて云ふやうな、相對に楽しいそんな嬉しいもんちや御座いませんでした。わたくしは知つてをりました。秋帆先生は、わたくしの深情（ふかき）を持てあましておいでになりました。』と云つてある。その口書を、いま仮り『岡部の陣屋』といふ題で取扱ふことにした。』

こういつたお島の説明を切り捨てているのである。説明でなく、具体の中で、それを描こうとした。加えて、更に注目すべき点は、この改稿のとき次の個所をも削除していることである。すなわち、すでに見てきたように、第二部「お島の語る秋帆先生」の末尾、岡部に尋ねていつたお島は、垣間見ではあるが、秋帆を一度見ている。その個所を削除している。

「でも、あとから思へば上首尾で御座いました。番人はお銭を受取るに粹に気をきかせ、垣間見に窺かせてくれました。先生は木格子の嵌つた圀（かど）のなかで、割合ひ元氣な御様子でちゃんとお坐りになつて片手に書物をひろげておいでになりました。涼しさうで、明るすぎるほどの揚座敷で御座いました。私が番人に重ねてお銭をつかませましたところ、その実直そうな中年者は急に迷惑がつて、『いや、

それは困る。その了簡は困る。』と云つて、お錢を返さうと致しました。そのとき私は、番人の察した通り夜になつて改めて先生にお目にかかりたいと祈つてゐたので御座います。」

しかし、それ故に、改稿後、お島の悲恋はより強く浮かび上ってくる。これほど恋いがれていて、これほど苦勞しながら、結局、幽閉後、一度も会えなかった、見ることもさへもできなかった。すべてお島の一人相撲に終つてゐるのである。

#### 四、

少し整理する。これら二段階の変化は、井伏の特質を多く語る。作品成立期、二部仕立てのはずが、三部に拡大、作品は秋帆物語からお島物語に変わった。そして、第二の

改変、三部を一つの作品に統合する過程で、少し修正される。前の三部仕立てで見たほどの激しいお島の恋物語ではなく、少し抑えた、しかし、それ故より哀しいお島の物語に変わつてゐるのである。そして、それらを通して、この作は、お島の書いた「存念書」ではなく、「存念書」を書いたお島の物語に移行している。そこに、当時の井伏の心の動き、変化があつたように思われる。それは変化というより、本源に帰つたという方があるいは正確かもしれない。

周知のように、戦争（戦後状況も含む）告発は、戦後の井伏の文字にひとしきり現われる。『お島の存念書』もはじめは、その企図の上の一つであつた。何かに擬して戦時体制の告発を志したものである。形態的にも内容的にもこの作品は明らかにその様相を持っていた。日本の近代化を何年か遅らせてしまった、天保、安政期の様々な思想弾圧、幕府権力とその配下の悪行の描出、それらはまさしく、戦中の軍部独裁とその配下の人々の独善の告発でもあつた。「二つの話」（昭21・4）や「侘助」（昭21・5・6）以来の戦争告発のスタイルをはっきり持っていた。しかし、書きすゝめるうち、お島の方へ筆者井伏の心は移つていった。ひたむきで無償の愛に生きるお島の生き方についてである。もとより、お島の造形は井伏にある。その中、お島を紹介して語ることより、お島の生を造ることの方に井伏の心は移つていったのである。

そして、そういったお島への作者の愛の形は、第三部「岡部の陣屋」のような形で、ひとまず昂揚し、お島に同化していった。しかし、それらを一括して一つの作品に統合するとき、昂揚は醒め、後退し、物語として整序されていくのである。

だが、今一つ付け加えておきたいことは、この作品の改稿はここで終つていないということである。昭和六十年十月、新たに刊行された『井伏鱒二自選全集』の第一巻（新



潮社)において、名作「山椒魚」の末尾が思い切りよく切断された、そのことは多くの物議をかもした。そして、同じ事情がこの『お島の存念書』にも起こっていたのである。同年十一月、同全集の第二巻に収録されたとき、井伏は凄まじい斧鉞をこの作品に加えている。私のいう、第三の改変である。細部の表現や句読点等の修正その他についても多岐にわたるが、わけて、「山椒魚」にも匹敵するほどの大削除がここにある。

すなわちそれは、旧第三部「岡部の陣屋」の個所に起こっている。見てきたように、お島は陣屋に入るため、土地の顔役累代五郎助に取り入り、金を借り、酒食を供じ、五郎助に襲われたりするが何とかしのぎ、陣屋に一步でも近づこうと苦心する。お島の苦労話としては、とりわけ話に艶のある個所であるが、これらの個所が、大きく二個所、約四千字を越える部分と約三千字の個所、四百字詰で約十五枚近くの分量が削り取られているのである。代りに、前者の約四千字を越える個所は次のように要約されている。

「私、川口屋に泊つてゐる間に、累代五郎助のところへ金簪を質入れして五郎助と知り合ひになつて、御陣屋の秋帆先生のことを探り当てました。」

後の約二千字、お島が五郎助に襲われる個所は切り捨てられたまま、何の補いもない。かくて、旧「岡部の陣屋」の主要部は消えているのである。

ここにも一つの大きな変化がみられる。先の第一、第二の改稿は、秋帆の物語からお島の悲恋物語になった、それはある意味では、構造上の乱れを呼んでもいた。第三部が奇妙に肥大していたのである。井伏はここで、それらを修正している。お島の物語の部分が大幅に削られ、そのことにより作品の精度は増した。しかし、作品そのものの内的なモチーフはまた少し姿を変えてきたのである。第三の変化はかくてある。

再なる整理をする。このように見てくると、作品『お島の存念書』における、成立と変化の過程、更にはその結果は、いかにも井伏の特質をよく表わしているように思われる。既述のように、戦後、井伏の文学は二つの傾向を持っていた。戦争告発と日常描出である。戦後の井伏の文学はその隆替を繰り返している。そして、大きくは、前者から後者へ、非日常告発から日常の描出へ動いている。

その中、『お島の存念書』は、「お島の存念書」、「お島の語る秋帆先生」、「岡部の陣屋」という作品生成の過程において、その隆替の一型を持っているのである。その過程と結果に一つの井伏の情念の移行があった。そして次に、それを一つの話として統合したとき、すなわち、右の三つの表題が消え、一つの作としてまとめられたとき、このお島の物語に傾いた情念は少し修正されている。これらは次

『お島の存念書』の生成の過程と結果とはかくてある。

注(1) 井伏鱒二「悪夢」(昭22・12)など。

(2) 拙稿「隆替する二つの世界―戦後の井伏鱒二」(平

8・12『芸術至上主義文芸』二十二号) 参照。

(3) 神谷忠孝「戦争体験」(平6・6『国文学解釈と鑑賞』59巻6号)、「陸軍報道班員・井伏鱒二」(平7・12『芸術至上主義文芸』二十一号)などに、こういった批判の問題が記されている。

(4) 拙稿「三つの『山椒魚』」(昭61・5『月刊国語教育』六巻二号) 参照。

行なうのである。

そして、それから三十三年のち、自選全集を編むとき、井伏は更なる修正を加えている。すでに統合のとき、お島への情念を少し修正した。しかしそれは、まだどこか情に溺れ、興に堕している感がある。井伏は、再び、事をより中道へ帰しているのである。戦争告発だけではあざとい、さりとて、日常描出が情に堕すると甘い。生はより非情である。そういった生の再考を、これらの過程で井伏は試みている気配がある。そういった生の再考は、まさしく「山椒魚」の改稿と軌を一にする精神の當為であった。<sup>4</sup>井伏の精神は、つねに右にも左にも揺れ過ぎることを否定してきた。八十八歳で「山椒魚」の甘さを切り捨てた井伏は、『お島の存念書』でも同じ試みを行なっているのである。